

一九世紀アメリカの作家ハーマン・メルヴィルの代表作の一つに「書記バートルビー」という中編小説がある。事務と人間との奇妙な関係をよくとらえた作品で、ドタバタしたコミカルなストーリーなのに、事務ならではの鬱陶しさのようなものも封じ込められている。何とも言えない居心地の悪さのようなものが逃れようなく作品世界を覆っているのだ。語り手にも、読者にも、そしておそらくバートルビーにも、この気分は共有されているが、私たちはその

「書記バートルビー」の空気

ち、ときには手痛い目に遭う。事務との付き合いでは、失敗や後悔の念がつきものである。事務は手強い。実に鬱陶しい存在なのである。

そんな私たちがそれでも事務から離れられないのだとしたら、それでも事務が人の心を虜にするのだとしたら、その背後にはどのような心の構造があるのだろうか。この問いは、人間らしさについて私たちに再考を迫る。そもそも人間らしさとは、人間であることへの執着ではなく、人間ならざるものへの執着にその本質があるのではないか。人間ならざるものとしての事務はきらびやかでも崇高でもなく、むしろ冷たく、殺伐としている。だからこそ、私たちは事務への執着を認めたくないし、ましてやおおっぴらには語りたくないのかもしれない。

根源にあるものをうまく言葉にすることができない。そこにはたぶん、事務のエキスのようなものが溜まっている。

作品の舞台は、事務の匂いが濃厚に漂うウォール街の小さな法律事務所である。事務所を経営する語り手は、二人の代書人 (screener) と助手を一人雇っている。代書人の仕事の中心は書類作りで、端的に言えば文書の複写である。かつてコピー機どころかタイプライターも (従ってカーボンコピーも) なかった時代には、事務作業の多くをこらした代書人が担っていた。複写とは言ってもある程度のリテラシーが必要となる。教育の機会が広がる中で教育機関が目指したのは、このような事務作業を担うための人材を養成することだった。「荒涼館」で重要な役回りを果たしたのも代書人ネモだったことが思い出される。

語り手はあるときこの法律事務所に新しく三人目の代書人を雇うことにした。そこで採用されたのがバートルビーだった。現在の二人の代書人が気性が荒く扱いが難しかったこともあり、口数が少なく作業に集中するバートルビーは、語り手にとっては理想的な新人と見えた。しかし、まもなく奇妙なことが起きる。

バートルビーが、頼んだ作業を「辞退」するようになったのである。文書の読み合わせ作業に加わってもらおうとすると、「しないほうがいいのですが」(I would prefer not to) と言う。やがてバートルビーはあらゆる依頼に対し、この「しないほうがいいのです」なる言葉を返すようにな

gunzou. 2023.5



題名	事務に狂う人々		
筆者	阿部公彦		
No.	12.	副題	事務と愛とバートルビー
備考			

人間がより幸福になるためには、人間らしさにこだわらない方がいいのだろうか。かつて私たちは上方を見上げ、超越的な力に期待を抱いた。そうした力によってかわったのは「科学的」と呼ばれる諸々の知の体系だった。人新世やポストヒューマンといった概念もまた、「人間からの離脱」を視野に入れていた。

事務は神でも科学でもない。環境やAIといった枠組みにも収まらない。しかし、「人間からの離脱」を視野に入れる点では同じである。事務もまた、人間を「外」へと導く装置なのだ。ただ、事務的思考は社会を上からではなく下から——つまり目に見えない、気がつかないところから——支えている。そして、ふだん私たちがおおっぴらには口にできない人間への不信や諦めをすべて呑み込んで、静かに稼働しつづける。

事務には損な役回りが押しつけられてきた。社会の中で事務の果たす役割は非常に大きく、もはや社会は事務なしでは回らないというのに、感謝や敬意は示されない。この連載では、人間が事務に抱く違和感から出発し、その付き合いの痕跡をたどってきた。事務は仰ぎ見られることも崇拜されることもない。むしろ軽視され、疎んじられる。他方で、私たちは事務に依存するだけでなく、苦手意識も持

り、一切の仕事を受けつげなくなってしまう*。

そのうちに、バートルビーの不思議な生息が明らかに
なってくる。少なくとも事務所に来たときにはジンジャ
ーナツ・クツキーを口にするだけで、食事をしていない様
子が無い。この人はどうい生活をしているのだろうかと言
り手は不思議に思い始める。すると、さらに驚くべきこと
がわかってくる。バートルビーは勝手に事務所に寝泊まり
していたのである。たまたま週末に事務所に来た語り手
は、寝起き姿のようなバートルビーに遭遇して驚く。
はじめはちよつとしたサボりかと思えたバートルビーの
振る舞いはやがて完全なる業務拒否となり、さらにはすべ
ての依頼や誘いが拒絶されるようになる。事務所でのバ
ートルビーの居場所はまるで不法占拠の相を呈し、本人は
壁を見つめたりしている。それでも語り手は強い手段をと
れない。バートルビーを追い出すかわりに、ついに自分の
ほうが事務所を移さざるをえなくなる。

しかし、バートルビーの亡霊はそれでも追いかけてく
る。語り手の借りていた部屋に新しく入ったテナントか
ら、苦情が来たのだ。バートルビーが居座つて迷惑してい
るといふ。ついにバートルビーは監獄に収容されてしま
う。語り手はそこを訪れ、彼が食うに困らないように人を
雇つて食べ物を提供しようとするが、バートルビーの方は
一切受け付けない。そして小説の最後、ついに彼は息絶え
てしまうのである。

弊も行われてきた。

アガンベンとバートルビー

そんな中、現在でも影響力を持つているのは、ジョル
ジョ・アガンベンによる解釈である。アガンベンはバートル
ビーが繰り返す「しないほうがいいのですが」という台
詞に注目し、これを「潜勢力」という概念に引きつけて読
み解く。「潜勢力」とは「内にひそんでいて、表面に現わ
れない勢力」のことだが、かつてアリストテレスは「何か
をすることができるという潜勢力はすべて、それをしない
ことができるという潜勢力でもある」という点に注目し
た。そこで問題となるのは、「存在しないことができるとい
う潜勢力が神にあるとすると、存在しないことができるとい
う潜勢力もある」ということである。こうなると神が悪
や非存在を欲しうることになる。神学者たちはニヒリズム
につながりかねないこうした思考を否定し、「神の意志は、
神の存在と同様、いわば、絶対的なしかたで潜勢力を欠い
ている」とした*。

これに対し神秘主義者は、創造に先立つものとして「神
的な潜勢力」や「深淵」を措定する考えを支持した。彼ら
は差異のない「深淵」こそが「世界が生じるもととなる
無」であり、「世界はこの深淵を永遠に支えとす」とし
た。アガンベンは次のようなベーメの考えを引用する。

これが「書記バートルビー」のあらすじである。ストー
リーの流れは明瞭だが、腑に落ちるようで腑に落ちない。
読者は居心地の悪い隘路のような場所に追い込まれてしま
う。原作の「ウォール街の物語」という副題が示すとおり、
本作はまさにウォール街を前にした閉塞感を描いて
いるように感じられる。それだけにこの作品にはさまざま
な解釈が試みられてきた。読者は腑に落ちたいのだ。人々
が興味を持つのは、バートルビーの正体である。この男は
いったい何者なのだろう。何を意味するのだろうか。レオ・
マルクスが早い段階で提示したのは、バートルビーに作家
メルヴィルの影を見る解釈である。筆写を生業とするバ
ートルビーは、たしかに執筆を生業とする小説家メルヴィル
と重なることが多い。マルクスは「書記バートルビー」
執筆時のメルヴィルが、一般読者の欲求を満たそうとする
ような作品を続けて書くことにうんざりして、ちよつどバ
ートルビーと同じようにそうした要求に対し、「否」と言
おうとしていたとする*。

こうした読解に対し、精神分析理論の影響を受けた読み
も行われた。とりわけ盛んに提示されたのは、作中、関心
の焦点となるのがバートルビーではなく、語り手の法律家
ではないかという考えである。分析を受ける立場にいるの
は、一見精神分析医のような構えをとっている法律家の方
だということだ。このように黒子かと思われていた法律家
への関心は徐々に高まり、セクシュアリティとからめた考
者、詩人になる*。

アガンベンはこうして、「しないほうがいいのですが」
と言うバートルビーが、「意志なしでいることができる」
状態、すなわち「純粹かつ絶対的な潜勢力である」無を要
求していると解釈する。バートルビーは「何かを絶対的に
欲する」ということのないままに為すことができること（そ
してまた、為さないことができること）に成功した*とい
うのである。

バートルビーは、ただ意志なしでいることができる。
彼は、絶対的潜勢力によつてのみ可能である。しか
し、だからといって、彼の潜勢力が実効性をもたない
というのでもないし、意志がないからといって現実の
ものにならずにとどまっているというのでもない。そ
の反対に、彼の潜勢力はいたるところで意志を超え出
ている（自分の意志をも、他の者たちの意志をも超え
出ている*）。

このような解釈がそれなりの影響力を持つてきたのは、
神学的な関心の隆盛のためというよりは、政治的なコンテ

クストのためである。ウースン・カンはそのあたりの事情を説明するのに、一九六八年五月以降に政治的な進歩主義が直面した問題に注目する。カンによれば、ドゥルーズ／ガタリをはじめとする思想家たちがバートルビーを語るきっかけとなったのは、自らの意志で隷従を選ば人たちを目的の当たりにしたことだった。このような人たちはまるで自ら全体主義に与しているかのようで、その姿に思想家たちは政治的な主体性を求めることの限界を感じた。バートルビーが独特な言葉遣いで示す抵抗は、そんな人たちに対し今ひとつの新しい抵抗の形を提示した。彼らが注目したのは、その意志の欠如だった。アガンベンは言う。

バートルビーがわが家とする禁欲的な怠け者の国には、あらゆる理から完全に解放された「より、むしろ」だけがある。それは好みや潜勢力といったものであって、それはもはや無に對する存在の優位を確証する役には立たず、存在と無のあいだの無差別のうちに理由もなく存在する。しかし、存在と無のあいだの無差別とは、対立しあう二つの原則が等価だということではない。それは、あらゆる理を離れて純粋なものとなった潜勢力の存在状態なのである。

政治的なコンテクストで見ると、バートルビーのこうした抵抗は法の力を脱臼させる可能性を持っている。法に對

ている「I would rather not」と「prefer not to」も、やや遠回しで遠慮がちな言い回しと言える。というより「遠慮」をジェスチャーとしてことさら示している。このような言葉の使い方は、相手に対する配慮を示しつつも相手の慮りにも訴えるようなもので、いわゆる「ポライトネス」の観点から説明できる。

ポライトネスとは相手の意図を汲みつつ、かつこちらの意図も提示して行われる距離の調整を示す概念で、言語学、文化人類学、社会学をまたぐ領域として近年注目が集まっている分野である。滝浦真人による解説を参照してみよう。

欲求は自分だけのものではない。対面する相手もまた、同じ2つの欲求を持っている。欲求と欲求を直接ぶつけ合っても、生じるのは争いだけである。ここに、最も広い意味での「交渉」が必要となる素地がある。「ポライトネス」とはさしあたり、この「交渉」に欠かすことのできない対人的配慮のことだと言ってよい。何ものにも媒介されないナマの人間関係は、見知らぬ他者との間で持つには近すぎて危険である。ナマの人間関係を回避するために他者を遠ざけることはできるけれども、遠すぎればこんどはたんに疎遠となつて人間関係自体が成り立たない。人間関係のそうした不安定を軽減するには、対人関係を調節する媒体

立したり違反したりするのではない。法には対立したり違反したりするものを受け止めるシステムが備わっている。というより、まさにそれが法というものである。これに對し、バートルビーの発言は異次元に法を誘いこみ、自壊させてしまう。

むしろ、こうした読みがバートルビーを救済者や抵抗者という既存のイデオロギーに引きつけた読みであることは否定できない。しかし、バートルビーの発言が引き起こす何ともいえない居心地の悪さの一端が、上記のような「存在と無のあいだの無差別」とは、対立しあう二つの原則が等価だということではない。それは、あらゆる理を離れて純粋なものとなった潜勢力の存在状態なのである」という、アガンベンのそれ自体たいへん居心地の悪い措置によってとらえられているのもたしかである。

バートルビーのポライトネス

「書記バートルビー」の居心地の悪さは、バートルビーその人から発するのではない。彼が何者であるかを追求しても違和感を完全に解消することはできない。小説末尾で言及されるバートルビーの過去も、必ずしも読者の気持ちの悪さを解消するわけではない。

あらためて確認すれば、バートルビーの繰り出す台詞は「I would prefer not to」というやや回りくどい言い方になつ

が必要なのである。

「しないほうがいいのですが」というバートルビーの持つて回った言い方は、欲求のぶつかり合いを避けるために距離を設けようとしているように聞こえなくもない。こうした言い回しは、直接的な欲求のぶつかり合いでは殺伐としてうまくいかないやり取りを間接的に行い、なめらかに成就させようとする。そういう意味ではそこには距離の調整と、もつと言えは政治や愛も読み取れる。

しかし、バートルビーの政治や愛はどこか歪んでいる。その原因としてドゥルーズは、*I would prefer not to* という発話が英語としてどこか不自然であるせいだとする。「prefer」はこうした意味あいではめつたに使われず、バートルビーの上司である代訴人も、見習たちも、普段はこの言葉を使わない（「おかしな言葉だ、わたしは絶対に使わないね……」）。通常の決まり文句は、むしろ、「I had rather not」であろう。

もちろん、慣用をやや逸脱しているとはいえ、文法的に問題があるわけではない。シンタクスが破綻しているわけでもない。そこでより重要な問題としてドゥルーズが注目するのが、この言い回しの「限界機能」である。「ぶつかりばうな語尾、NOT TO」があるために、拒否をしてはいても何を拒否しているのが限定されず、そのせいで、この決まり文句に過激な性格、一種の限界機能をもたらして